

著者紹介

昭和十六年、京城生まれ。早稲田大学英文科を卒業後、NHK教養部プロデューサーとして活躍。昭和四十六年「幻覚の地平線」でSF界に華々しくデビューし、作家活動に入る。

以来、精力的に話題作を発表、その巧みな構成力と視覚的で爽やかな文体によって、従来にない大型で迫力のあるエンターテインナーとして、現在、もっとも期待される作家のひとつである。

『大滅亡(ダイ・オフ)』『わが赴くは蒼き大地』『爆発の臨界』『失なわれたものの伝説』『ぼくたちの創世記』など著書多数。

大放浪

昭和五十二年八月十日 第一刷

定価は帯・カバーに表示しております

著者 田 中 光 二

発行者 徳 間 康 快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(43)六二三一(番代表)
振替東京四一四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えます)

大放浪

田中光一

Koji Tanaka

大放浪 目次

災厄の都市^{まち}

5

空かける箱舟

75

追跡者たち

185

装幀／上原
徹

災厄の都市^{まち}

「——今日は、これぐらいにしておこう」

ロバーツ教授が、壁のデジタル時計をちらりと見上げていった。

ぼくはふかい吐息をつき、コンピュータ端末ディスプレイの入力スイッチを切った。

「明日はいよいよ、モハーベ砂漠を縁に変えるぞ。めいめいが、プロジェクト・モデルを考えておくように。そいつを持ちよって、一つ一つ検討することにしよう」

ぼくは、首筋を揉みながらゆっくりと立ち上がった。

二時間以上にわたるコンピュータとの睨み合いは、ひどく疲れる。若さのさかりの肉体を持っても、精神的エネルギーをとことん吸い取られるような消耗感を味わ

う。——気付くと、七人の仲間も、同じような仕草の最中だった。

その部屋は、ふつうの教室という概念からは、遠く外れるものだった。どちらかといえば、巨大な情報ネットワークを集中制御する管理センターに似ていた。部屋は扇形になっており、半円をえがいて、コンピュータの端末ディスプレイがずらりと並んでいる。その正面の壁に、そのディスプレイのCRTスクリーンの拡大版というベキマルチ・アイドホール・スクリーンが設けられている。コンピュータからの情報インフォメーションを示すばかりでなく、ビデオセンサーとも直結しており、フィルムその他の映像データも、自由に呼び出せるのだった。

ロバーツ教授は、気象工学の主任教授だ。ぼくら八人は彼の指導のもとで気象工学の単位をとるべく、専門課程の大詰めに入っており、目下は局地気候改変に関する

実習にはげんでいるところだった。

自分でもいうのも照れくさいが、ぼくらはこのカリフォルニア工科大学^{UCLA}きつてのエリートということになるだろう。気象工学は最新の、そして最重要視されつつある地球工学の分野だが、その複雑な性格からいって、なまはんなかなお頭の持ち主には歯が立たない。

既知の気象学から始まって、地球物理、海洋物理はもとより、生態学、通信工学など、おびただしい分野の専門学がからんでくるや、やこしい学問だ。大学の地下に鎮座しているマンモスコンピュータの助けを大々的に借りることが出来るとしても、基礎をかためただけで相当の努力が要求されることは、たしかだった。

——たとえエリートといえども、講義から解放される時間というのは、うれしいものだ。すべての学生が味わう、あのどこかちよっぴりむなししい解放感を、ぼくらも味わっていた。

ノート類をストッパーで縛り、コンピュータ実習室^{lab}を出た。ぼくらが冗談まじりに「電気イス部屋」と呼んでいる部屋だった。

「——デイトか？」

声とともに脇腹を小突かれた。見返ると、カールが髯^{ひげ}

面をにやつかせていた。カール・シュミット……西ドイツから留学にきている、セミナーの同級生だ。学生寮のルームメイトでもある。

「野暮なことを訊くな」

ぼくは眉をしかめて見せた。

「電子脳ばかりが相手じゃ、こっちの血管まで冷たくなって来る。下手するとノイローゼになるぜ」

「なるほど」

シュミットの笑いは、いつそう清潔さから遠いものになった。

「せいぜい、温めてもらうんだな」

その声を聞き流して、階段を三階分駆け下りた。地球工学部の玄関ホールから、キャンパスへと出た。

六月の、爽やかと呼ぶにはいささか控え目にすぎる乾いた熱気が、ぼくを包んだ。夏が間近いことを、即思い知らせくれる陽気だった。——砂漠に雨をふらせるのもけっこうだが、と一瞬ぼくは思った。この乾きすぎた西海岸の気候も何とかせねばならんな。

キャンパスをよぎって、森へと近づいて行つた。各学部の建物に五角形にかこまれているキャンパスは、ちよつとした公園ほどの広さがある。芝生と植え込みに

おおわれているその中央に、メタセコイアが三本並んで立っている。中国四川省から贈られたものだ。その樹々を、学生たちは「森」と呼んでいた。

芝生の上は、学生たちでいっぱいだった。午後四時。おおかた授業は終わっているのだろう。空手の練習に打ち興じているグループもいれば、円陣を組んでヨガのアーサナをうたっている連中もいる。

フリスビーを飛ばし合っている連中もいた。フリスビーは一九七〇年代にずいぶん流行^{はや}ったらしいが、三十年後の今日また爆発的に流行り出したのである。ばかばかしいようだが、投げかたによつてはどこへ飛んで行くか分からない一種の不条理性が、どうも受けているらしい。

——「森」の樹蔭へ来た。まさに「森」とはいえて妙だ。たった三本の大樹ながら、神秘的な陰影を作り出しているのである。落葉松^{かまつ}の新芽にも似たその若葉のやわらかい緑は、ぼくらを一種の夢見心地に誘うのだった。

中央の樹の、根もとの芝の上にノートを枕にして横になった。土の感触を背に感じることに——それは人間に許された最高の贅沢の一つだろう。大地は呼吸している。そのおだやかな息づかいが、体と心の緊張をときほぐし、眠れとささやきかけるのだ。

2

——ぼくは、いつしか、とろとろと眠ったようだ。低い音楽的な声が耳もとにささやきかけるのを、夢うつに聞いた。

「ツトム・カナコア・ホクスワース。眠るにはまだ陽は高すぎるわ……」

同時に重く温かいものが、容赦なく体におおいかぶさって来た。雨に濡れた干し草のような香ばしい息とともに、唇がぼくの臉の上をさまよい始めた。

「よせ、息がつまるぜ」

呻きながら目を開けた。おどろくほど大きな褐色の瞳が、それ自体が一つの生きものであるかのように、ぼくをのぞき込んでいた。

「遅刻だぞ、ブルー」

のしかかっている体を、いささか手荒に押しわけ、体を起こしながらいった。

ブルーは肩まで届く髪をひと振りし、ツンと顔を反らせた。十九の娘にしては強すぎる線を持った横顔が、ぼくの目にさらけ出された。オリブがかった肌いろに、

くつきり張り出している頬骨^{ほおほね}。鼻は、どちらかといえは驚鼻に近く、愛くるしさよりも威厳を彼女にもたらしっている。

かけ値なしにすばらしいのは、目だった。瞳は先にいったように鶯色だが、まつげが長く切れ長で、野性の精悍さと高貴さが、微妙に混じり合っていた。

ブルー・ローズ。奇妙な名に聞こえるかも知れないが本名だ。ナヴァホ・インディアン^{インディアン}の酋長^{チーフ}だった父祖^{アトラス}の血が、若い娘が背負うには重すぎるかも知れぬ、疲れをにじませたようなその威厳をはぐくんだのだ。

彼女の父親は、いささか皮肉な願いをこめてその名を付けたようである。ブルー……かつては彼らだけのものだった、広大な大地の上にひろがる蒼空への憧れをこめた名にちがいない。同時に、ほろんでゆく民族のふかい憂鬱が、そこには影をおとしていたのだ。

しかしぼくは、その名のひびきが好きだった。もっとも、自分の愛している娘の名を嫌いになるのはむしろかしいことだろう。

ブルー・ローズ。そのメランコリックで詩的な名にもかわらず、彼女もまた知的戦士のひとりである。生物^{バイオ}工学^{工学}——生物超能力の応用理論を専攻しており、ぼくよ

り一年下ながら、早くも将来を嘱望されている優秀な学生なのだった。

知り合ったのは半年前である。彼女の投げたフリスビーが、ぼくの首根っ子をあやうくへし折りそうになったことから、すべては始まったのだ。彼女は謝り、ぼくはショックの代償としてデイトを要求した。彼女はあっさりとそれを受け入れたというわけである。むろん今ではそれがわずか半年前に始まったなどということは、とうてい信じられなくなっていた。

「——そんなことをいうものじゃないわ」

彼女が顔を反らせたままいった。

「いっしょうけんめいに走って来た女に対して。天才には、デリカシーというものは無いの？」

ぼくは唸り声をあげながら、彼女に飛びついた。もがく体を押え込んだ。

「そいつはルール違反だ。そのことはタブーだってことは分かっている筈だぞ」

たしかに、IQ一六五の人間は天才と呼ばれてもやむをえないにちがいない。が、そう呼ばれることほどぼくの嫌いなものはなかった。なぜなら、それはぼくが努力して獲^かちえたものではないからだ。

「分かったわ、トム」

白い歯をほころばせて笑った。笑うと、顔からすべてのきびしさが消え、その若さにふさわしい輝くような笑顔になった。

「ルール違反が重なったところで、仲直りしない？ 時間をもったいないわ」

ぼくは立ち上がり、彼女の体を引き起こした。

インド風サリーの——目下の女子学生の最新風俗は東洋民俗衣装である——尻についた芝^{エンジェル}ずを払ってやった。

「時間については同感だ。そいつを有効に使ういいアイディアはあるのかい？」

彼女は、目をわずかに細めてぼくを見つめた。そのために瞳の輝きがいつそう増したようだった。

「今からまっすぐに寮の私の部屋へ行けば、夜の十一時までふたりきりでいられるわ。シルがデイトで外出するのよ」

シルとは彼女のルームメイトである。ぼくはゆっくり頷いた。

「ブルー、君の出すデータはいつも正しい。電子脳^{ブレイン}がそのうちやきもちを焼くかも知れないぜ」

3

「……あなたの体からは、海の匂いにするわ、ツトム・カナコア・ホクスワース。あの島があなたを育んだというの、ほんとうなのね」

仰向いたぼくの胸に、顔を寄せながらブルーが呟いた。ぼくらは、快楽の潮^{カル}が引いてゆくときの、あのみちたりてはいるがどこか虚ろな弛緩に身をゆだねていた。

彼女には一つの癖があった。ぼくをフルネームで呼ぶことである。もともとそれは、彼女がもともと情緒的な存在になっているときに限られているようだったが……。

ぼくの名も、彼女のそれに劣らず個性的なものといえるだろう。かつて、ハワイと呼ばれる島は、ポリネシアから渡来した民族が支配していた。何世紀か経って、白人の植民者が島を変貌させた。さらに百年後、島は東洋からの移住者を迎えるに至った。

ぼくの血は、三者混交の歴史のブレンドによって生み出されたものである。「ツトム」は日系の血を、「カナコア」はハワイ王族の血を、「ホクスワース」は植民以来島の経済を牛耳ることになった白人名家——もとはとい

えば宣教師だが——の血を、それぞれ意味しているのだ。いわばぼくは、たぐいなく豊饒な島の風土がつちかった、生粋のハワイ人なのだった。

ぼくは腕をのびし、彼女の頭を抱き寄せた。

「ブルー。君の体からは大地そのものの匂いがする。そいつは知っているかい？」

「——もちろんよ」

顔を上げて微笑した。

「それが私の誇りだもの」

たしかに彼女の「匂い」は際立っていた。彼女の息と同様、それは自然がかもし出すものだった。森や草原が、その生命のたくましいさかりに発散するむせるような匂い——彼女の肉体がクライマックスに向かって収斂（しううれん）すると同時に、靈光（れいこう）のように彼女の全身から放射されるのだった。

彼女がとて体を引いた。ばねの利いた身ごなしで立ち上がり、窓へ向かって歩いていった。ぼくはその裸の後ろ姿を目で追った。

少年のように引きしまっているが、優美さを少しも欠いていない。すでに見慣れてはいるが、決して見飽きることのない裸身だった。

彼女は、閉ざされていたカーテンをなかば開いた。その体ごしに、シティのおびただしい灯火がきらめいて見えた。女子寮（こすいりょう）はパークレーの西の丘の上に立っている。贅沢な眺望（ぜいさく）が一つの特色だった。

彼女はその夜景をあてどなく見下ろしているようだった。何かに心を奪われているらしい。精神（せいしん）感応（かおう）者（ぶ）でないぼくには、それが何かは読めない。しかし一刻でも、彼女の心が自分を離れたと感じることは辛かった。

「どうしたというんだ？」

冗談めかしてぼくはいった。

「雨なんぞは降っていないぜ。何も気に病むことはない」

雨、といったのは、むろんヘミングウェイの小説にひっかけたのである。『武器よさらば』の中で、ヒロインのキャサリンが、ベッドを恋人ヘンリーとともにしたあと、雨の音を聞いてふいに憂鬱にとらえられる。——どうかすると、「雨に打たれて死んでいる自分の姿が見えるからな」と、彼女はいう。

「——そうね」

振り返って微笑した。スタンドの灯りに映えたその顔には、しかし翳りがあるようだった。

「でもなぜか憂鬱だわ。私たちは、この世界が存続することを当り前のように受け取っている。……でもそれは間違いで、とうもない破滅が、すぐそこまで来ているような感じがするのよ」

ぼくはかすかに胸が冷たくなるのを感じた。かつて大地の精霊たちと交わって暮らした赤い民^{レッド・ピープル}は、運命を予知するふしぎな能力を持っていたという。彼女にも、その能力は受けつがれているのだろうか。災厄のひそかな足音を、意識の外にある耳で、とらえているのではないだろうか。

「ぼくには、何も見えない」

ぼくは声をことさらに弾ませていった。

「見えないものは、信じないようにしているんだ。君もそうすべきだよ、ブルー」

「そうね」

今度の微笑はほんものだった。滑るように歩いて来た。「早く夏休みが始まるという——ヨットで海へ出れば、何もかも忘れられるわ」

ぼくは頷いた。ぼくの胸にも、まばゆいような期待がふくれ上がって来た。そのヨット旅行は、春先からすでに計画していたものである。ハワイ南方のパルミラ島へ

のクルージング。むろん二人だけでだ。その近海に散在している無人のサンゴ礁^{しょう}の一つで、一か月のファンタスティックな休暇をすごす計画だった。

完璧に二人だけの世界を守るために、無縁^{ワザヤ}さえもヨットから外してゆくつもりだった。繰り返すようだが、ぼくには、原始的な丸木舟^{カヌー}で、ハワイまでの三千キロの航海をなしとげたポリネシア人の血が流れている。こと航海にかけては、いささかの自信があったのだ。

「そうさ……」

ぼくは彼女の腕を引き寄せながらいった。

「一か月も二人だけでいられるんだ。よしんば戻って来てこの都市^{まち}が破滅していたとしても、それがどうだというんだ」

4

女子寮のブルーの部屋を出て、寮の駐車場^{キヤンパス}に駐めてあった車に戻ったのは、夜の十時だった。

むろん、彼女の部屋を出たくて出たわけではない。出来れば朝まで一緒に過ごしたかった。

が、彼女のルームメイトが十一時には戻って来ることを

になっていたし、何よりもぼくには、今晚しなければならぬ。課題^{レクシ}があつたのだ。

例のロボッツ教授から仰せつかった、モハーベ砂漠緑化計画の、プロジェクト・モデル作りである。提出するまでに四日はあるが、これは生易しい仕事ではない。

学生の個室それぞれにそなえつけられているミニコンピュータを使って——有機系素子を回路に組み込んでいる優秀なやつだ——、今晚からさっそく苦闘を開始しなければならぬだろう。

そんなわけで、車に乗り込んだ時は少しばかり憂鬱^{ブルイ}だった。エンジンをかけ、乱暴に発進させた。

車は、二人乗りの、タービンエンジン搭載のハイブリッド・カーである。つまり、地上走行車とGEM（グラウンド・エフェクト・マシン）を兼ねているタイプだ。

三年ほど前の型で、スタイルの上では流行おくれになりかけていたが、ぼくの好みでさまざまな改造を施してあった。衝撃吸収装置やコンピュータ自動操縦システムなどをすべて取り外し、車重を軽くして加速と運動性を向上させてある。

車の歴史が始まって以来、若者は自分の車に対して同じような愛しかたをして来たようである。若者の客気^{かつき}と

いうやつは、おそらく永遠に変らないものの一つなのだろう。

むろん法令で、GE効果で——つまりエアクッションを使って——走れる場合は、きびしく制限されている。緊急避難の場合か、または砂漠や湿地帯などの未開の不整地を走る時にしか許されていない。

ぼくはマニュアルのシフトの操作を楽しみながら、車を道に出し、すつとばし始めた。スピード違反は承知の上だが、そんなものをかまっていられない心境に、人間は時折なるものだ。——たとえば恋人との逢瀬に、わずかな時間でピリオドを打たれた夜などもその一つである。

——男子寮^{ドミトリ}は、女子寮から、丘を二つほどへだてた、大学の教員居住区の外れに建てられている。

カリフォルニア工科大学^{UCLA}は、バークレーの北の丘陵地帯に、キャンパスやさまざまな実験・研究施設を中心として、学生や大学関係者の居住区を散在させている、巨大な一個の都市^{メトロポリス}といつてもいいのだ。

きっかり十五分で、寮に着いた。寮といっても、二十階建て二棟の、堂々たるホテルなみの建物だ。だだっ広いモータープールの一角に車を突っ込み、玄関へ向かった。

玄関はロビーを兼ねており、その壁ぎわに、メイルボックスがずらりと並んでいる。

ぼくは自分の箱ボックスのフラップを持ち上げ、中をさぐった。習慣的な動作だった。数通の手紙が入っているようである。ごみでもさらうように、引っぱり出した。

エレベーターの前まで行き、コールボタンを押してから、機械的にあらためていった。

いずれも、大企業——とくにさまざまなハードウェア・メーカーの——マークが、れいれいしく肩にしるされている封書だった。

内容は、読まなくても分かっていた。新製品の発表会や、工場見学、あるいは幹部交替の披露パーティなどへの招待状である。

ぼくらシニアタイCIITの学生が、それらの大企業の垂涎の的であることはいうまでもない。将来の幹部候補生として、これほど魅力的な存在もないわけだ。

いきおいこの種の招待状が連日舞い込むことになる。何とかコネをつけておこうという下心が見えすいていた。エレベーターが来た。乗り込んでから、ぶっさらばうに告げた。

「十二階」

パネルのグリーンのランプがまたいた。組み込みのコンピュータが了解の返事をよこしたのだ。音もなく上昇し始めた。

ぼくは、最後の一通に目を落とした。いぶかしげに見つめなおした。

やや大型の純白の封筒だが、表には、ぼくの名と住所の他は、何一つしるされていない。

引っくり返した。裏もきれいなものだった。

封筒の中央に、ぼつりと小さく、イニシアルを思わせる二つの組み合わせ文字が浮き上がっているだけだった。

——R・R。

デザイナー意匠も、べつだん凝ったものではない。しかしかつて、テキサス人が牛に押した烙印のように、力強い単純さを示していた。

首をひねった時、エレベーターが止まった。

ぼくは首をかしげた姿勢のまま、自分の部屋へと歩いて行った。

5

ブルーと同じように、ぼくにもルームメイトがいた。